

日本銀行貨幣博物館について —コレクションのあゆみと公開への取り組み—

関 口 かをり (日本銀行金融研究所貨幣博物館)

1. はじめに

日本銀行金融研究所貨幣博物館は、1985年11月に開館した。展示施設については、2015年にリニューアルオープンし、昨年11月で開館35周年、リニューアル5周年を迎えた。

博物館としては、日本貨幣史を扱う「歴史系博物館」であり、貨幣を対象とする「専門博物館」でもある。そして日本銀行が運営母体であることから「企業博物館」として分類されることもある。

お金やお金の歴史を扱う類似の博物館としては、硬貨を製造している造幣局による博物館と紙幣を製造している国立印刷局による博物館がある。それらはそれぞれ、お金の展示に関しては、金属のお金の変遷とそのつくり方、紙のお金の変遷とそのつくり方について詳しく展示している。

当館を運営している日本銀行は日本銀行券を「発行」し、お金の価値を安定させることを担っている。そのため、金属のお金と紙幣の両方について、その歴史を古代から現在に至るまで発行とその使われ方の両方の側面から紹介するという切り口で、多くの実物資料とともに紹介している。そのような貨幣博物館の主要コレクションのあゆみと、その公開への取り組みを紹介することで、本稿に課せられた貨幣博物館の紹介としたい。

なお、「貨幣」の定義は難題であるが、本稿では、コレクションの種類の説明に用いることが中心であるため、基本的には金属のお金(硬貨)と紙のお金(紙幣)を含むものとする。ただし、必要に応じ、「金属貨幣」「紙幣」と区別する。

2. コレクションの沿革

貨幣博物館の所蔵資料の中核は、戦前の古貨幣収集家・研究者であった田中啓文氏(1884~1956年)の「せんべいかん 銭幣館コレクション」である。同コレクションは古代から近代にいたる日本の貨幣を中心

としているが、中国を中心とした東アジアの貨幣も充実したコレクションとなっている。

2.1 銭幣館コレクションについて

銭幣館コレクションの最大の特徴は、日本と東アジアの貨幣だけではなく、それらの貨幣にまつわるさまざまな周辺資料を含む点にある。例えば、貨幣をつくるための道具(和同開珎や中国の貨幣の錢范、藩札の版木など)、貨幣の入れ物(財布、貯金箱など)、貨幣が描かれた錦絵(千両箱や小判が描かれた福神絵、経済状況の風刺画など)、貨幣にまつわる版本(江戸時代の貨幣カタログ「錢譜」、漢籍など)、古文書(金座関係史料など)といった、江戸期から明治期を中心とした民俗資料や古記録など多様な資料を含んでいる。

古貨幣のコレクションは国内の他のいくつかの博物館でも所蔵しているが、銭幣館コレクションのように多様な周辺資料を含むコレクションは類例をみない。



図1 銭幣館で貨幣を手取る田中啓文氏

田中啓文氏は製革業を営む家に生まれた。同氏が幼い頃はまだ寛永通宝一文が一厘として通用し

ており、お小遣いとしてもらった古貨幣から、その収集に関心を持った。その後、先輩のコレクターなどから学び、研鑽を重ね、1920年には東洋貨幣協会会長に就任した。1923年に私設の博物館「東洋貨幣研究所 錢幣館」(品川区荏原の邸宅内)を設立し、同氏が収集していた資料を保管・展示し研究を行っていた。1930年には「古貨幣展」を開催し、当時の首相や日本銀行総裁も訪れたという。

同氏は結城豊太郎第15代日本銀行総裁(在任期間：1937年7月～1944年3月)と親交があったが、戦局が悪化する中、渋澤敬三が第16代日本銀行総裁(在任期間：1944年3月～1945年10月)に就任した。田中啓文氏は戦火による焼失・散逸を避け、早く資料を安全な場所に保管したいという意向を持っており、民俗資料に造詣が深い渋澤敬三総裁が自ら錢幣館に足を運び、同コレクションを日本銀行に寄贈する話が進んだ。そして1944年12月に日本銀行は、資料を活かすことを条件に、10万点余の錢幣館コレクションを譲り受けた。渋澤敬三は退任後のエッセイ(1960年)で、日本銀行に来たときからの夢の1つとして貨幣博物館を設置したいと思っていることを述べている¹⁾。

また日本銀行は、資料を譲り受けた時の田中啓文氏との約束により、錢幣館コレクションの受け入れとほぼ時を同じくして、錢幣館で田中啓文氏の助手を務め、同コレクションを研究していた郡司勇夫氏(1910～1997年)を迎え入れた。

2.2 日本銀行標本貨幣として

錢幣館コレクションを受贈する以前より、日本銀行では、日本の古い貨幣や外国貨幣などを「標本貨幣」として保管していた。譲り受けた錢幣館コレクションもそれらと合わせて、日本銀行標本貨幣として保管された。

戦後、1946年に錢幣館コレクションの金貨・銀貨がGHQに接收されそうになった。しかし、郡司勇夫氏が「日本の進路は平和に徹し文化国家に在るとされている以上、文化財は自らの手で守り、生かすべきである」と力説し、文化財として公開することを条件に接收を免れることができた。

そして1948年から、本店内の標本貨幣室で限定的な公開が開始されたが、当初の展示点数は約500点ほどであった。その後、展示室「標本貨幣室」の場所やそれを管理する組織については変遷があったが、最終的には、本店本館に隣接する敷地に新たに建てられた南分館内へ1985年にそれまでの標本貨幣室から拡充移転する形で「貨幣博物館」がつけられ、現在に至っている。より詳しく述べると、日本銀行100周年を記念して金融研究所貨幣博物館が1982年に設置され、南分館が竣工した翌年1985年11月に貨幣博物館が開館した。貨幣博物館は東京駅日本橋口からも徒歩10分という好立地にある。

3. 貨幣博物館の展示について

展示は、博物館の公開機能を担うチャンネルとして最も多くの人目に触れる部分である。貨幣博物館は1階が入口・受付で、2階にロビーと約600平米の展示室がある。

常設展示の展示資料の約9割が、錢幣館コレクションの資料である。常設展示の錢幣館コレクション以外の資料は、日本銀行券など、まさに日本銀行の標本貨幣として自ら収集してきた資料である。常設展示で展示している資料自体は、開館当初から大きくは変わっていない。

また貨幣博物館の展示の使命は日本銀行が運営する博物館として、「貨幣そのものや関係資料、研究成果をご覧頂くことにより、貨幣の歴史や役割、貨幣と文化・社会の関わりについて考えて頂くきっかけに」ということであり、こちらも開館当初から基本的には変わっていない。

基本的な展示資料や使命は変わらない中で、なぜ5年前にリニューアルをする必要があったのか、いくつかのポイントを紹介する²⁾。

3.1 常設展示 日本貨幣史

設備の老朽化や資料保存上の展示ケースの問題もリニューアルに至った大きな理由であったが、やはり展示内容面での見直しの必要性が高かった。その必要性を明確に意識する契機としては、日本

貨幣史を書き換えた2つの研究上の動きがあった。

1つは、20世紀終わりの飛鳥池遺跡における富本銭とその鑄造工場の発掘調査であった。日本最初の貨幣とされていた和同開珎以前に富本銭が国家により作られていたことが分かり、古代貨幣史像が大きく塗り変わったものである。

もう1つは、東アジアの貨幣史の動きを踏まえた中世貨幣史研究の大きな進展である。特に貨幣博物館が事務局を勤めた研究会で、中世および中近世移行期の貨幣史をどのように捉えるか、議論が数年にわたり行われ、その研究成果の一部が『貨幣の地域史 中世から近世へ』（岩波書店、2007年）として纏められたことが当館にとって重要な出来事であった。

貨幣博物館が開館してから30年で日本貨幣史の研究は大きく進展した。しかし、古代銭貨についてみても、飛鳥池遺跡での富本銭の発掘後、すぐに貨幣史が書き換えられたわけではない。多くの議論が積み重ねられた結果、発掘から約10年を経て、ある程度の見解がまとまるようになったものである。

開館当初からの常設展示の内容を見直す中では、それぞれのトピックに関するさまざまな見解を踏まえ、日本貨幣史の専門博物館の常設展示として、どこまで踏み込んだ説明をすることが可能か、関係研究者の方々からコメントを受領し、慎重に検討を重ね、その時点での学術的なスタンダードを示した。

同じ展示資料でもどのようなストーリーへ組み込むかで、資料の見え方は大きく変わる。今後も専門博物館として、日本貨幣史の研究動向をフォローし、学術的なスタンダードを示していけるよう、日々見直しを行っていきたいと考えている。

また、リニューアル後の常設展示では、貨幣の発行側の観点だけでなく、各時代で何をいくらかで購入できたかなど、毎日使うお金の歴史をより身近に感じてもらえるよう利用者側の観点も加味した³⁾。

3.2 常設展示 トピック展示

トピック展示は、通史の日本貨幣史とは異なる視点、例えばお金のつくり方のような技術史、使われ方のような風俗史、といった切り口でお金の歴史を紹介する展示コーナーとして新たに設けた。ここでは、貨幣・紙幣だけではなく、銭幣館コレクションの多様性を示す資料をできるだけ多く公開したいという意図もあり、折りを見て展示替えを行っている。貨幣博物館には独立した特別展示室などが無いことから、企画展などを開催する際は、このトピック展示コーナーを一度撤収する形になるが、終了後は、その展示企画のエッセンスをトピック展示に盛り込んで展示替えを行うこともある。

3.3 展示設備

リニューアルにあたり、ウォールケースを除き、展示ケースを更新し、大きな仕様変更を行った。具体的には①空気環境にデリケートな金属資料の展示・保存に配慮した仕様、②車椅子でも観やすい仕様、③手すり部分の展示の交換が容易な仕様の覗き型ケースを導入した。

しかし、ケース内の空気環境はリニューアル後、しばらく安定せず、一部部材の交換などを行った。現在は安定しつつあり、空気環境の各種モニタリングを継続している⁴⁾。

またロビーには、可動壁によるレクチャールーム(兼ビデオコーナー)を新設し、学校向けプログラム、講演会や夏休みの拓本体験プログラムなど教育普及事業の開催が可能となった。

3.4 来館者について

1985年の開館後しばらくは事前予約制で、開館当初の年間来館者は2万人程度で推移していた。その後予約制を廃止し、開館後10年を過ぎた頃から、所蔵資料の整理とそれらをベースとした企画展の開催など、博物館としての活動の充実に努めてきた。そうした地道な活動の継続、校外学習や修学旅行での来館者の増加、「意外と面白い」という口コミの広がりに加え、近年の取り組みとし

て日本橋の再開発プロジェクトを含めた地元関係者との地域連携などに努めたことにより、来館者数は年々増加し、ここ10年ほどは年間約10万人前後で推移している。

校外学習や修学旅行で来館する学生が増えていること、夏休み期間中の家族連れの来館も多いことから、リニューアルにあたっては、分かりやすく親しみやすい展示デザインを心がけた。また若年層を意識し、貨幣の重さ体験などのハンズオン展示も時代ごとに設けた。

また2019年には来館者のスマートフォンから利用できる音声ガイド(日本語・英語)を導入した。日本橋観光の中で当館を訪れる外国人も徐々に増えていることから、今後の活用が期待される。

(本節についてはいずれも新型コロナウイルス感染症流行前までの状況)



図2 展示室内常設展示コーナー

4. 所蔵資料の公開目録について

貨幣館コレクションを中心とした所蔵資料については、体系的にその概要を示すような公開目録は未作成だが、一部の 카테고리ごとの目録を順次公開している。以下公開順に紹介する。

4.1 貨幣・紙幣について

まずコレクションの中心である金属貨幣・紙幣については、目録ではないが、その概要を把握できるものとして、『図録 日本の貨幣』(1~11巻、東洋経済新報社)⁵⁾を挙げることができる。これは、貨幣博物館の開館以前の1970年代に、貨幣博

物館の前身である標本貨幣室を担当していた日本銀行調査局(主として前述の郡司勇夫氏と外部の研究者)により編集された書籍である。

同書の各巻の冒頭には、貨幣博物館が所蔵するほぼ全ての種類の日本の金属貨幣・近代以降の紙幣、そして主要な藩札についての写真がカラーで掲載されている(同書はそれまでの日本貨幣史の研究成果の集大成として作られていることから、貨幣博物館以外で所蔵している資料の図版も一部含んでいる)。また同書の各巻の後半では、貨幣が発行された時代背景や発行の経緯の詳細が述べられている。そのうち古代から近世の金属貨幣の貨幣博物館所蔵の資料画像については、現在、貨幣博物館のホームページで公開を進めており、今後も金属貨幣の画像を中心に、公開を進める予定である⁶⁾。

同書の出版から約40年が経過し、解説内容については研究の進展に伴い、大きく書き換える必要がある部分も多いものの、後継にあたる文献の出版はなく、今でも貨幣博物館にとってだけでなく、日本貨幣史を研究する上での基礎的な文献となっている。

4.2 紙資料・道具関係の目録

1990~1992年にかけて金属貨幣・紙幣以外の貨幣館コレクションの簡易目録がつくられ、大学図書館などへ配付された。『日本銀行所蔵貨幣館資料目録』と題され、3分冊から構成されている。簡易的なタイトルと年代、著者などが項目として取られている。目次から資料群の概要が掴める部分もあるので表として掲げる(表1)。

4.3 『日本銀行所蔵・貨幣関係錦絵目録』

『日本銀行所蔵貨幣館資料目録』の第1分冊の画像資料のうち「Ⅲ画像資料 B錦絵」について、国立史料館・原島陽一氏に委託して作成した目録(1991年刊行)で、現在ホームページにてPDFを公開している⁷⁾。掲載分のうち、過去に展示で使用した一部資料については画像もホームページで公開している⁸⁾。

・第1分冊 文書・図書・画像史料 1990年	
I 文書	<ol style="list-style-type: none"> 1. 貨幣関係 2. 紙幣関係 3. 山田羽書関係 4. 金融機関関係 5. 頼母子関係 6. 富関係 7. その他
II 図書	<ol style="list-style-type: none"> 1. 貨幣関係 2. 金融・財政・経済関係 3. 古銭家関係 4. 考古・金石関係 5. 歴史関係 6. その他
III 画像史料	<ol style="list-style-type: none"> A 絵図・地図 B 錦絵 1. 通貨・金融関係 2. 風景画 3. 風俗画

・第2分冊 証書類 1991年	
<ol style="list-style-type: none"> 1. 米切手類 2. 手形類 3. 富関係 4. 頼母子関係 5. 質関係 6. 商品券・代用切符類 7. 預金証書・債券類 8. 印紙切手類 9. 取引関係書類 10. 雑証書類 	

・第3分冊 器具・物品類 1992年	
<ol style="list-style-type: none"> 1. 貨幣製造用具類 2. 紙幣製造用具類 3. 貨幣・紙幣保管容器 4. 貨幣収納容器 5. 貨幣運送容器 6. 貨幣・紙幣携帯容器 7. 貨幣秤量用具 8. 貨幣封包用具 9. 鑑札・制札類 10. 富関係用具 11. 雑器具類等 	

表1 『日本銀行所蔵銭幣館資料目録』

4.4 『日本銀行所蔵銭幣館古文書目録』

『日本銀行所蔵銭幣館資料目録』の第1分冊の「I 文書」のうち一部を別途目録化したもの(2000年刊行)で、現在ホームページにてPDFで公開している⁹⁾。また、本目録に採録した資料のほとんどは、マイクロフィルムをスキャンした画像をホームページで公開している¹⁰⁾。

4.5 藩札データベース

所蔵資料のうち藩札については、前掲の『図録 日本の貨幣』に主要なものは紹介されているが、藩札の種類が多さから点数は絞られている。

それとは別に、「古貨幣・古札統合データベース」¹¹⁾にて、現在約9,000点の当館所蔵の藩札資料の画像が公開されており、今後も順次追加予定である。同データベースは東京大学経済学図書館と「信用貨幣の生成と進化のメカニズムに関する研究会」(代表：鎮目雅人・早稲田大学教授)によるもので、現時点では、東京大学経済学部資料室所蔵の古貨幣コレクションと、当館の藩札のコレクションの画像が公開されている。

東京大学経済学部資料室の古貨幣コレクションは、郡司勇夫氏が一時期整理を行っていた経緯があり、貨幣博物館にとっては姉妹コレクションともいえる。うち紙幣のコレクションは、2代目安田善次郎氏の旧蔵資料で25,000点にのぼる¹²⁾。データベースとしての使い勝手の改善は今後望まれるところではあるが、同コレクションと貨幣博物館の藩札を合わせると、日本の江戸期の紙幣のかかなりの部分を網羅すると考えられ、今後の研究での活用が期待される。

4.6 その他

以上のほか、展示企画の調査の際などに作成した富くじ(江戸時代の宝くじ)関係資料の目録(PDF)をホームページにて公開している¹³⁾。また銭譜類の一部について、画像を公開している¹⁴⁾。

以上のように、当館所蔵資料の目録は、その時々々の制約の中で散発的につくられてきており、使い勝手が良い状況ではない。本来であれば、こ

ここで掲げた目録等を、整備・集約した詳細目録や利便性の高いデータベースの作成・公開が望まれるところではあるが、現段階では、少しずつでも所蔵資料にアクセスしやすい情報を公開していくことを優先し、今後も所蔵資料情報の公開の拡充に努めていきたい。

なお、内部の収蔵資料のデータベースは、博物館用のパッケージソフトで管理している。資料のメタデータと画像を、日々の整理・調査業務の中で、少しずつ拡充している。

5. 日本銀行と金融研究所について

最後に、貨幣博物館が属している日本銀行と金融研究所について簡単に紹介する。日本銀行は日本の中央銀行として1882年に設立された。当時、各地に設立されていた民間銀行をひとつのネットワークとして結びつけるとともに、銀行券を発行して紙幣の発行を一元的に行い、お金の価値を安定させる役割を担うこととなった。その後、金本位制への参加と離脱、金融恐慌、第2次世界大戦後のインフレーションや高度成長など、幾多の変遷を経て現在に至っているが、現在も基本的な役割は変わっておらず、物価の安定と金融システムの安定をその目的としている。

日本銀行創立100周年にあたる1982年に金融経済の理論、制度、歴史の研究等を行う日本銀行の内部組織の1つとして設立されたのが金融研究所¹⁵⁾である。

貨幣博物館も同時に金融研究所内に設置され、3年後に開館した。また、創立100周年事業の一環として、1982～1986年にかけて『日本銀行百年史』(全6巻ならびに資料編)¹⁶⁾が刊行された。このとき、同時に金融史関連資料の収集が金融研究所内で開始された。その業務が現在、日本銀行に関する歴史的資料の収集・保存・公開を担う「日本銀行金融研究所アーカイブ」¹⁷⁾に繋がっている。

6. おわりに

海外でも貨幣博物館のようなミュージアムを有している中央銀行は多い。種類としては当館のように、その国の貨幣史を中心に紹介するようなミュージアムもあれば、中央銀行の機能の紹介や金融教育をテーマとしたミュージアムもある。

いずれの国にも共通しているのは、人々の暮らしを支える身近な存在であり、また中央銀行が深く関与している貨幣や金融について、できるだけ多くの方に、展示に触れていただきながら理解を深めていただくとする姿勢である。現在、キャッシュレス化が進む中で、貨幣の在り方が変容しつつあるようにも窺われ、歴史を通じてお金とは何かを考えることへのニーズが増えているように感じられる。実際、来館者のSNSでの反応を見ると、当館の展示を観たことをきっかけに、キャッシュレス社会について考えさせられたといった感想がしばしばみられる。国家が貨幣を発行しなかった中世や、中央銀行が存在していなかった近世には、どのような「お金」が使われ、人々は「お金」をどのような存在として考えていたのか。そのあたりに今後の「お金」をどのように捉えていくのかのヒントが隠されているのかもしれない。
(せきぐち かをり)

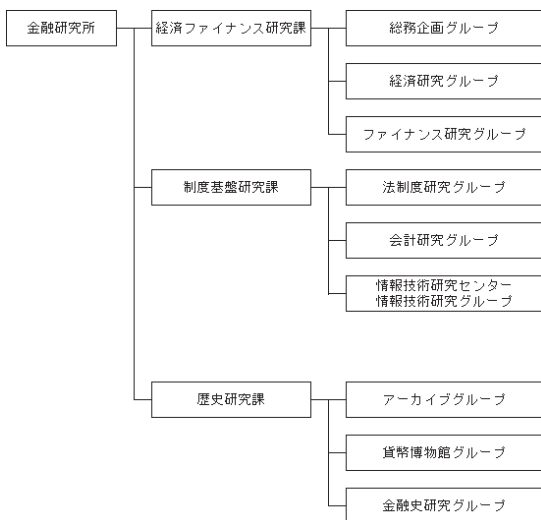


図3 金融研究所 組織図

<参考文献> (URL参照は全て2021-1-18)

- 1) 渋澤敬三. “日銀収蔵貨幣標本のいきさつ”. 渋澤敬三著作集 第三巻. 平凡社, 1992, p.547-549.
- 2) 日本銀行金融研究所貨幣博物館. 貨幣博物館 常設展示図録. 日本銀行金融研究所貨幣博物館, 2017, 95p.
- 3) 日本銀行金融研究所貨幣博物館. 常設展示リニューアルの記録. 日本銀行金融研究所貨幣博物館, 2017, 100 p.
- 4) 日本銀行調査局編. 図録日本の貨幣. 東洋経済新報社, 1972~1976,(全11巻).
- 5) 湯川紅美. 関口かをり. 新展示ケース内の空気環境の整備について —日本銀行貨幣博物館リニューアル時の取り組み—. 2018, (文化財保存修復学会第40回大会 ポスターセッション).
- 6) 貨幣博物館. “貨幣博物館 調査研究資料 所蔵資料目録”
<https://www.imes.boj.or.jp/cm/research/>
- 7) 原島陽一. 日本銀行所蔵・貨幣関係錦絵目録. 1991.
https://www.imes.boj.or.jp/cm/research/mod/nishikie_mokuroku1.pdf
- 8) 貨幣博物館. “7)の関連画像”
<https://www.imes.boj.or.jp/cm/research/nishikie/>
- 9) 日本銀行金融研究所. 日本銀行所蔵錢幣館古文書目録. 2000.
https://www.imes.boj.or.jp/cm/research/mod/kankou_komonjo.pdf
- 10) 貨幣博物館. “日本銀行所蔵錢幣館古文書目録 掲載画像”
<https://www.imes.boj.or.jp/cm/research/komonjo/>
- 11) “古貨幣・古札統合データベース”
https://www.i-repository.net/il/meta_pub/G0000381kahei
- 12) 小島浩之. 「古貨幣・古札画像データベース 試行版」公開の意義と課題. 月刊IM. 2008.1, 47 (1), p.10-14.
<http://hdl.handle.net/2261/53459>
- 13) 貨幣博物館. “富関係資料の目録(一例)”
<https://www.imes.boj.or.jp/cm/research/tomi/tomiagarimonkucho.pdf>
- 14) 貨幣博物館. “整理中の錢譜等”
<https://www.imes.boj.or.jp/cm/research/senpu/>
- 15) 日本銀行金融研究所.
<https://www.imes.boj.or.jp/>
- 16) 日本銀行. “日本銀行百年史”
<https://www.boj.or.jp/about/outline/history/hyakunen/index.htm/>
- 17) 日本銀行金融研究所アーカイブ.
<https://www.imes.boj.or.jp/archives/index.html>

日本銀行貨幣博物館について —コレクションのあゆみと公開への取り組み—
関口 かをり(日本銀行金融研究所貨幣博物館)

日本銀行金融研究所貨幣博物館は、1985年に開館したお金の歴史を紹介する博物館である。貨幣博物館の中核のコレクション「錢幣館コレクション」は、戦前の古貨幣収集家田中啓文氏によるものである。同コレクションは日本と東アジアの古貨幣に加え、それらの貨幣にまつわるさまざまな周辺資料を含む点にある。展示や目録によるこれまでの公開の取り組みを紹介する。